

ワールドトリガー～遊真もトリオンモンスターな話～

To 3 m3

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイトルの通り

基本的に遊真を中心に話が進みます

多少性格も変わってるかも

目次

第二話 第一話

8

1

## 第一話

＜緊急警報、緊急警報。ゲートが市街地に発生します。市民の皆様は直ちに避難してください。繰り返します、市民の皆様は直ちに避難してください。＞

校庭の真ん中にゲートが発生しそこからトリオン兵が現れる。

「警戒区域の外にゲートが開くなんて、どうなってるんだ!？」

驚く修と、

「モールモツドが四匹。お、こっち来た。」

いつもの飄々とした態度を崩さずに状況を確認する遊真。

あらわれた四匹の内半分が遊真らの方へ壁を登向かってくる。そして残りの二匹は近くにいた生徒を追いかけ始めた。

遊真は迫ってつ来るモールモツドをどうしたものかと考える。

(さっきオサムにトリガー使うなって言われたばっかだしなあ。うーむ、これはこれは困った。……とりあえず逃げるか。)

「おいオサム、とりあえず逃げようぜ。ん、どうしたオサム？」

言うが否や素早く動き出そうとする遊真に対して、修はトリガーを右手に握ったまま動こうとしない。そしてその眼には決意の色が浮かんでいる。

「トリガーオン！」

そう修が叫んでトリオン体に換装した瞬間窓を突き破ってモールモツドが教室に侵入してきた。

上から大きく振り下ろされたブレードを左右に散開して二人ともが回避しモールモツドから間合いを取った。

「仕方ないな。なあレプリカ、トリガー使っていいか？」

『それを決めるのは私ではない。遊真自身だ。ただ、もしボーダーに見つかったら追われるかもしれない。』

「おれはそれでもいいけど。」

『……ユーマはよくてもオサムに迷惑がかかるか？近界民を匿っていたことがばれてしまう。』

「確かにそうだな。うーむどうするべきか。」

「おい、誰としゃべってるんだ空閑」

モールモッドの攻撃を避けながらも遊真は己の何もないと相棒と相談するがレプリカのことを知らない修からすれば突然遊真が喋りだしてしかも遊真と自分以外いないというのに答えが返ってきたのだ。驚くしかない。

その間にももう一匹モールモッドが窓から侵入してくる。

どうやら二匹目は修に照準を合わせたらしい。

「逃げるオサム、こいつらはおれがかたずけとくから。」

「でも、お前一人じゃ。ぐっ！」

そう口論してるうちにもモールモッドの攻撃は止まってくれるわけもなく修は武器を持つ左腕を切り落とされた。持ち主を失ったブレードがモールモッドの攻撃を躲していた遊真の近くに転がってきた。

「お、ラッキー。このトリガー使えばボーダーにばれないかも。」

そう言っただけ遊真は転がっているブレードに跳びつく。そのまま拾い上げてブレードを再展開しモールモッドのブレードを迎え撃った。

切り上げられた遊真と振り下ろされたモールモッドのブレードがぶつかり合いお互いに弾かれる。

間髪入れずにモールモッドの懐に飛び込んだ遊真は目のような形の弱点に対して真つすぐにブレードを突き立てる。

モールモッドを一瞬にして屠った遊真が修の方を見るとちょうど修がモールモッドに真つ二つにされ換装体を失ったところだった。

「オサムッ!?!」

本来の持ち主がトリオン体を失ったため遊真が手に持っていたブレードも消えてしまった。

モールモッドのブレードが生身の修に迫る。

「強印【ブースト】!!」

モールモッドのブレードが今まさに修の命を刈り取るうとしたとき、遊真がモールモッドを横合いから蹴り飛ばした。

「無事かオサム？」

「ああ、おかげさまで。」

モールモッドの動きを警戒しながらも修の無事を確認する遊真。その時遊真に一つの考えがひらめいた。

地面に落ちている修のトリガーを拾い上げる。

「おい待て何する気だ」

「ちよつと借りるぜ。トリガーオン。」

トリオン体に換装しブレードを生成して起き上がって再び攻撃してきたモールモッド迎え撃つ。

「待て空閑。それは訓練用のトリガーだ。お前のは違う。死ぬぞ！」

「いや、オサムもさつきこれで戦おうとしたじゃん。」

「いや、それはその。」

「にしてもこのトリガー思ったより出力出ないな。そのくせに重い。」

それもそのはずだろう、いま遊真が使っているのはレイガスト。シールドモードとブレードモードを使い分けて戦うトリガーである。防御・重装型だ。

そんな会話をしながらモールモッドの攻撃を捌いているとなかなか倒せない遊真にしびれを切らしたのかモールモッドは修に対して攻撃する。

間に割り込んで攻撃を受け止めた。遊真としては修に死なれるわけにはいかない。彼には最近結構助けられてるし遊真は彼のこと案外気に入っている。

だが、修を守るために少々無理な姿勢で受けてしまったようで窓の外へとはじき出されそうになる。飛ばされながらとつさに修の制服の襟をつかんで一緒に外に出た。

「しまった、外に出たらおれが戦ってるのばれるじゃん。」

軽く辺りを見回してみると何人かの生徒がこつちを見ていた。

「ゲホッ、ゲホッ。ほ、他の人たちは大丈夫なのか？」

「自分が死にかけたのに他人の心配とはお人好しが過ぎるぞオサム。ん、三匹ともこつち来やがった。ちよつと失礼。」

モールモッド三匹を確認した遊真は修を抱えて校舎の屋上へ飛び上がる。

「修君！」

声が出た方に目を向けるとそこには遊真と同じくらいの身長少女がいた。

「ほほう、オサムお前彼女いたのか。」

「な、ちよつ、違う。千佳はそんなんじゃない！」

「か、彼女って!？」

「まあいいや。とりあえずもうちよつとトリガー借りとくぜ。」

「あ、待てっ。」

軽口をたたき、屋上から飛び降りた。修が制止する声が聞こえたが気にしない。自分が戦っていることはもう他の生徒にも知られてしまったしこのトリガーなら自分が近界民であることを知られずに戦える。こうなったらやるしかないだろう。

校庭の真ん中に降り立ち突撃してくるモールモッド三匹を捌いていく。手に持つブレードには刃こぼれの一つも無い。

三匹を相手しながらそろそろ攻撃に出ようかと考えていた時、遊真の視界の外から幾つものトリオン弾がモールモッドに命中した。

「ッ!？」

驚きながらもその隙を逃さず弱点をたたき切る。そして、後ろに飛び退いてトリオン弾が飛んできた方向に目を向ける。

「嵐山隊ただいま現着した、これより戦闘を開始する！」

三門市民なら誰もが知る部隊がそこにいた。

嵐山隊が現着してから三十秒とかからずにモールモッドは撃破され今は生徒の安否を確認しているところだ。死者六名、重軽傷者十二名。遊真と修が二匹と戦ってるうちに残りの二匹が暴れたらしい。

修にトリガーを返してクラスメイトに囲まれている遊真に嵐山近ずいてくる。

「君がさつき戦っていた子だね。名前を聞いてもいいかな？」

「ん、おれか？空閑遊真です。」

「空閑君か。君が戦っていなかったらもつと被害が出ていたかもしれない。うちの弟と妹がこの学校なんだ。ありがとう。」

そう言つて嵐山は彼の兄弟と思しき人物に突撃していく。

「オサム、誰だアラシヤマつて？ボードーだよな？」

「嵐山さんはボードーのA級隊員でボードーの顔だ。テレビとかにもよく出てる。」

「ほう、てれび。」

二人の会話を聞いていたクラスメイト達から「嵐山隊を知らないのか」という驚きの声上がるが遊真が帰国子女だということを思い出して勝手に納得していく。

そんな会話をしているうちに嵐山が戻ってきた。

「にしても君強いな、フリーのB級隊員か？」

嵐山は遊真の換装体の服装がC級の白いものとは違ったため何か勘違いをしたようだ。

「いえ、ただのいっぱんじんです。」

「なっ!？」

「うそ!？」

ボードーに入ってるわけでもなく近界民と言うわけにもいかない遊真はしれつと嘘を吐いた。いや、近界民な事を除けばあながち嘘でもないかもしれない。

これには嵐山と彼の後ろに無言で立っていた女性隊員も驚きの声を上げる。それもそうだろう、ついさつき自分たちの前で見事な動きでモールモッドを屠った人物がただの素人だというのだ（実は違うが）。と、そこで女性隊員が重大な事実思い至る。

「つまりボードー隊員以外がトリガーを使用したということじゃない、大問題ですよ嵐山さん。」

「ああ、そうだな、でも結果的に市民の命を救ってるわけだし。」

「そもそもなんで一般人がトリガーを？」

そこで修が前に出た。

「それは僕のトリガーです。空閑と二人でいた時に襲われて換装したんですけどやられてしまって。それで空閑が。」

黙っていればいいのに正直な奴だなあ、と遊真は思う。まあ、そこが修の美点でもあるわけだが。



「君は？」

「C級の三雲修です。」

嵐山の問いに修が答える。

「何、C級隊員が訓練以外でトリガーを使って拳銃の果てにはやられて一般人に使用させたの。これは重大な隊務規定違反よ。嵐山さん、これは処罰されてしかるべきだと思いますが。」

「うーんこれはどうするべきか。」

なにやら話がややこしくなってきたところで遊真が。

「なあ、おれたちがトリガー使わなかったほうがよかったて言いたいわけ？えっと、ハンドガンの人」

「なっ、ハンドガンの人ですって！木虎よA級五位嵐山隊の木虎藍。知らないの？」

「うん知らん。でどうなの？」

「例え市民の命が救われたといっても隊務規定違反は隊務規定違反よ。今回は何とかなったかもしれないけど他のC級にマネされたら大変だわ。」

「でもトリガー使わなかったらおれたち死んでたぞ。」

「確かにそうかもしれないけど何の処罰も無しじゃ他のC級に示しがつかないわ。」

「半分くらい嘘だな。おれが褒められるのが気に食わない？」

「何を言ってるの、私はただ「はい、そこまで。」

いつの間にか居た嵐山隊のもう一人の隊員が二人の言い合いを遮った。

「現場検証は終わった。回収班を呼んで撤収するよ。」

「でも時枝先輩。」

「でも何も彼らをどうするかは上の人が決めることだよ。ですよね嵐山さん。」

「なるほど、充の言う通りだ。」

彼らの中で結論が出たらしい。

「今回のことはうちの隊から報告しておこう。三雲君と空閑君は今日中に本部に出頭してくれ。」

「は、はい。」

「わかった。」

「処罰が重くならないように力を尽くすよ。」

そう言って嵐山隊は去っていった。

## 第二話

嵐山隊が帰っていった後、生徒たちは一旦教室へ戻って行く。

そして遊真と修は案の定質問攻めを受けていた。

「三雲、お前ボーダー隊員だったんだな。」とか

「空閑君すごいね初めてだったんでしょ、怖くなかったの?」といった質問に時に真実で、時に嘘で、時に曖昧に答えながらやり過ぎす。

放課後、もうくたくただがボーダー本部に行かなくてはならないのでためとりあえず下駄箱まで降りていく。そこで二人が目当たりにしたのは人垣に囲まれて口では断っていても満更ではない顔でポーズを決めて写真を撮られている木虎の姿だった。

「なにやってんだこいつ。」

思わず遊真が呟く。修もこれには言葉が出ないようだ、おどろきかたまっている。

遊真の呟きが聞こえたのか、「はっ……!」と気づいて遊真たちの方を見て若干恥ずかしそうに咳払いをし、

「改めて自己紹介するわ。私はボーダー本部所属嵐山隊所属の木虎藍、本部まで同行するわ。」

と、言い放った。

「ほう、道案内か?」

「違うわ、あなた達が逃げないように監視しに来たのよ。」

「別に僕たちは逃げたりなんかしないよ。」

「命がかかっていたとはいえあなた達はルールを破ったの。そう簡単に信用してもらえらると思はないことね。」

「……………」

「まあとりあえず行こうぜ、喋るなら歩きながらでもいいじゃん。」

人垣を抜けて三人は本部基地へと歩き出す。

途中爆撃型トリオン兵イルガーが市街地に現れ木虎が自爆モードまで追い込んだがそのまま街に突っ込もうとしたのを遊真がばれなように川に落としたり、修がレプリカに驚いたり救助活動したりと

トラブルに巻き込まれたものの、三人はボーダー本部基地までたどり着いた。

遊真たちは木虎と別れ会議室へと向かう。

「失礼します。」

「しつれーします。」

遊真と修が会議室へと入るとそこにはすでにボーダーの幹部が勢揃いしていた。

「来たか。」

そう呟いた遊真たちの正面にいる人物、ボーダー本部指令の城戸が遊真を見据えて言い放つ。

「お前は空閑の息子か？」

この会議室にいる人物の半分以上がその言葉の意味を理解できない。

「どの空閑さんのことを言ってるのかは知らんけど、空閑有吾の息子ならおれだよ。」

その言葉に城戸は表情を変えぬまま遊真を見つめ、遊真から見て右にいる人物、玉狛支部長の林道匠とボーダー本部長の忍田真史は「お」とどこか喜びを含んだ声で驚き「なるほど有吾さんの息子なら訓練のトリガーでモールモッドを一刀両断したのも納得だ。」等と口々に呟く。

「ほう、何人かは親父を知ってるみたいだな、ちようどいい聞きたいことがあるんだけど、モガ「失礼しまーす。」ん、一人増えた。」

「迅悠一、お召しにより参上しました。」

「ご苦労。」

遊真が質問をしようとしたときに、扉が開いて迅と名乗った男が入ってきた。

「お、君たちは？」

「あ、三雲です。」

「空閑遊真だよ。」

「ミクモ君にクガ君か、俺は迅よろしく。」

そう挨拶を交わしたところで城戸が先ほど遊真が言いかけた質問

が何だったのかと問いかけ遊真が話し出す。

「モガミソウイチっていう人知らない？親父の知り合いでボーダーに  
いるって言ってたんだけど。」

その言葉を聞いた途端先ほどの三人と迅の顔が強張る。

一瞬の沈黙、それを破ったのは迅だ。

「最上さんならこれだよ。」

そう言っつて腰に着けていたトリガーをテーブルの上に置く。

それを見た遊真は目を見開いて驚きそして悲しそうね目をした。

話についていけない修は（初めて空閑の驚いた顔を見たかもし  
れない）と場違いなことを考えていた。

ここまでのやりとりを黙って見ていた他の幹部、開発室長の鬼怒  
田、メディア対策室長の根付、外務・営業部長の唐沢の三人と城戸の  
後ろに控えているA級三輪隊隊長の三輪が会話に参加してくる。正  
確には幹部の三人だけだが。

「それで、その空閑ってというのは誰だ。」

「我々にもご説明いただきたいですねえ。」

そう鬼怒田と根付が問う。

返答したのは忍田だ。

「有吾さんは四半年前にボーダーの存在が公になる前から活動してい  
た、言わば旧ボーダーの創設に関わった人間、ボーダー初期のメン  
バーの一人だ。私と林藤にとっては先輩にあたり、城戸さんにとつて  
は同輩にあたる。」

そう言い忍田はさらに続ける。

「それで遊真君、有吾さんは今何所に？」

「死んだよ。」

忍田の問いに遊真はただ一言そう答えた。

「……!？」

「なっ!？」

「……………」

有吾を知る三人は驚きを隠せない。

「これが親父の残したブラックトリガーだよ。」

遊真が自らの指に着けている黒い指輪を見せながら言う。

「ここまでの会話に違和感を感じていた唐沢が遊真に問う。

「どうも話が分かりませんね。知り合いだというのに子供の存在を知らなかったり。まったく連絡を取りあつてなかったんですか？」

その問いに答えたのは遊真だ。

「そりやそうだよおれら近界にいたんだし。」

そう言つてあつさりと自分が近界民だという事を暴露した。

その言葉にいち早く反応したのは三輪だった。いきなり遊真に向けて発砲したのだ。

遊真が展開したシールドがそれを弾く。

それを見た修が叫ぶように三輪に問いかけた。

「何してるんですか!!。」

「近界民を名乗つた以上そいつは敵だ。ここで殺す。」

そう言い捨て城戸以外の幹部陣の制止の言葉も聞かず撃ち続ける。その瞳に映るのは憎悪だ。

対する遊真は楽しそうに笑みを浮かべてブラックトリガーを起動する。

これには余裕を持つて傍観していた城戸と迅も制止を促さざるを得ない。

「待て三輪。」

「待った空閑君。」

「止めないでください指令。あれは近界民です、我々の敵ですよ！」

「止めないでよ迅さん、あつちはやる気みたいだぞ。」

結局三輪が城戸に基地を壊す気かと言われ攻撃をやめた為戦闘は回避されたが、まだ会議場は一触即発な空気を残したままだ。

見かねた迅が口を開く。

「とりあえず二人をどうするかを決めましょうよ。イレギュラーゲートについても考えないと。」

「じゃあさ、おれの日本への滞在を見逃してとオサムの処罰を免除にしてよ。」

遊真がとんでもないことを平然と言い放つた。都合がいいにも程

がある、そんな周囲の声を聞きながら話を続ける。

「その代わりイレギュラーゲートの原因は突き止めてやるからさ。」  
「ほう。」

イレギュラーゲートは現在ボーダーの頭痛の種だ、技術者総出でも全く原因不明なその原因を目の前の近界民は突き止めてくれるというのだ。取引の材料としてはなかなか魅力的ではある。

「心当たりがある？」  
「あるよ。」

「馬鹿馬鹿しい。こいつを捕まえて吐かせればいいだろう。」

城戸と遊真の会話を切って捨てたのは鬼怒田だ。確かにここはボーダー本部いくらブラックトリガーといえどもたった一人くらい倒せないわけがない。

「やってみる？」

挑発的な笑みを浮かべる遊真、ほぼ空気と化している修の冷や汗がとんでもない量になっている。

「いいだろう。条件を飲もう。」

「城戸指令!？」

「俺も賛成ですね。」

承諾した城戸とそれに賛成する迅。

「ただし、24時間以内に突き止める。そしてボーダーに敵対する行動をとった場合はわかっているな。」

そう条件を付けてだが。

「オツケーオツケー。そんなに時間はかからないよ。わかったらオサムを介して連絡するよ。じゃあ帰っていい？」

「ああ。」

会議室から出ていく遊真、修も慌てて付いて行く。

「いいのか空閑？イレギュラーゲートの原因を突き止めるなんて。」

「大丈夫だよ。レプリカに心当たりがあるらしいし。」

「とういかなんで僕を介して連絡するんだよ。」

「ああ、パイプ役だよ。オサムにも役目がないといかんだろう。」

「あ、ああ。」

修が蚊帳の外にならないようにと遊真なりの気配りだった。  
会話をしながら二人は帰路に着くのだった。